

平成 22 年 6 月 4 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2009

課題番号：19720203

研究課題名（和文）古墳出土遺物の基礎資料整備に関する実践的研究

研究課題名（英文）Study on preparation for basic data of relics excavated from ancient tombs

研究代表者

阪口 英毅（SAKAGUCHI HIDEKI）

京都大学・大学院文学研究科・助教

研究者番号：50314167

研究成果の概要（和文）：考古遺物の保管・管理状況や研究動向を踏まえ、保存処理が施されておらず、かつ実測図や写真などの二次資料が十分に整備されていない古墳出土遺物を取り上げ、最新の研究で求められる水準を満たした資料化を実施することを目的とした。これらには多様な材質の製品が含まれるため、それぞれの特性に応じた適切な資料化と報告の方法を吟味した。大阪府七観古墳出土遺物の再整理作業および滋賀県大塚越古墳出土遺物の整理作業を実施したほか、2009年度には京都府聖塚古墳出土遺物の整理作業を実施した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is preparation for basic data of relics excavated from ancient tombs, which have not been treated for conservation yet, or which have not been prepared basic data like drawings and photographs. Measurement of relics excavated from Shichikan tumulus have progressed about half of the whole. Classification and measurement of beads excavated from Otsukagoshi tumulus have been finished. Preparation for basic data of relics excavated from Hijirizuka tumulus has been finished.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	400,000	0	400,000
2008年度	400,000	120,000	520,000
2009年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,200,000	240,000	1,440,000

研究分野：考古学

科研費の分科・細目：考古学

キーワード：古墳出土遺物 資料化 七観古墳 大塚越古墳 聖塚古墳

1. 研究開始当初の背景

(1) 古墳出土遺物の保管環境

古墳時代を考古学的に研究する上で、古墳出土の副葬品や埴輪などの遺物が果たす役

割が大きいことはいうまでもない。古墳の編年研究はもちろん、それを時間軸とした首長墓系譜の研究や地域間交流の研究など、あらゆる研究テーマにおいて、古墳出土遺物はその基礎をなす一次資料として位置づけられ

る。そのため、古墳時代研究が安定的に推進されていくためには、一次資料たる古墳出土遺物が、資料として活用できる状態で恒久的に保管され続けることが重要である。

土器や埴輪などの土製品、腕輪形石製品や玉などの石製品については、ほとんどの場合、特別な処置を施さずとも通常的环境下で保管が可能である。一方、鏡や刀剣などの金属製品、木棺や革製漆塗盾などの有機質製品については、出土後の環境変化による劣化を防ぐために保存処理が必要なほか、保存処理後も温湿度管理のゆきとどいた环境下で保管されることが望ましい。

しかしながら、そうした体制が一般的となる以前に実施された発掘調査による古墳出土遺物の場合、保存処理が施されていないことが多い。また、各所蔵機関の努力にもかかわらず、そうした遺物の保存処理のための十分な予算を新規に確保することは困難な状況にある。その結果、とくに錆化しやすい鉄製品などは、たとえ将来的に保存処理の予算が確保されたとしても、復元が不可能なほどに崩壊が進行してしまっていることも、現実的な問題として決して少なくない。

(2) 資料化の意義と近年の動向

このように一次資料の保存のための措置を講じることが困難な場合、次善の方策として、実測図や写真などの二次資料を高い水準で作成しておくことが考えられる。

調査年次のさかのぼる遺物については、現在の水準からすれば不十分な資料化にとどまっている場合も多く、あらためて資料化を進めること自体が学術的に大きな意義をもつ。また、日々劣化が進行する遺物に対して、その資料化は緊急に必要な作業といえる。

こうした状況のもと、近年では、過去の調査による古墳出土遺物の整理報告や、過去に報告された古墳出土遺物の再報告などの取り組みが、さかんにおこなわれるようになってきた。

報告書として結実したものに、福岡県稲童古墳群（山中英彦（編）2005『稲童古墳群』行橋市文化財調査報告書第32集、行橋市教育委員会）、福岡県月岡古墳（児玉真一（編）2005『若宮古墳群Ⅲ』吉井町文化財調査報告書第19集、吉井町教育委員会）などがある。これらは学史的にも著名な古墳であり、また出土遺物も特色ある重要なものということもあって、その刊行による情報の共有化にはきわめて大きな意義があると評価できる。

応募者も、大阪府紫金山古墳（上原真人・吉井秀夫・阪口英毅（他19名、3番目）2005『紫金山古墳の研究』平成14～16年度科学研究費補助金（基盤研究(B)(2)）研究成果報告書、京都大学大学院文学研究科）、兵庫県小野王塚古墳（阪口英毅（編）2006『小野王塚

古墳 出土遺物保存処理報告書』小野市文化財調査報告第27集、小野市教育委員会）の遺物報告に携わり、その成果への反響の大きさに、あらためて二次資料の作成および公表の重要性を強く認識した。

2. 研究の目的

(1) 研究の主目的

上述のような遺物保存状況と研究動向を踏まえ、保存処理が施されておらず、かつ十分な二次資料が整備されていない古墳出土遺物を対象に、最新の研究で求められる水準を満たした実測図作成や写真撮影を実施し、古墳時代研究の基礎資料整備に寄与する。

(2) 研究の対象とする古墳出土遺物

具体的な対象として、大阪府七観古墳（樋口隆康ほか1961「和泉国七観古墳調査報告」『古代学研究』第27号、古代学研究会、pp.1-24）、滋賀県大塚越古墳、京都府巡礼塚古墳の各古墳出土遺物を取り上げる（小野山節1968『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第2部、京都大学文学部）。

(3) 研究の副目的

上記の遺物には、埴輪などの土製品、玉・琴柱形石製品などの石製品、鏡・三環鈴などの青銅製品、甲冑・馬具などの鉄製品、帯金具などの金銅製品が含まれる。それぞれについて最先端の研究をおこなっている研究者の助言を求め、精確な資料化に努める。その際、報告媒体を念頭に置きつつ、遺物の特性に応じた適切な資料化方法の吟味を意識的におこなう。

また、実測図作成や写真撮影などの作業を進めつつ、類例の検索やそれらの資料調査を踏まえた比較検討などを通じて、取り上げた古墳出土遺物の時空間的な位置づけについて考察をおこなう。

以上の成果を、紙媒体への報告の掲載などの方法によって公表する。

(4) 研究の特色

本研究では、古墳出土遺物の資料化を実行し、報告まで完遂することを重視する。あわせて、将来的に同種の遺物が報告される際に規範とされるような、適切な方法による資料化・報告の方法を模索・実践することを意識している。

また、本研究で取り上げようとしている三古墳は、いずれも副葬品に甲冑を含むことからもうかがわれるように、百舌鳥古墳群における有力古墳や地域における首長墳であり、標識的な副葬品組成を備える。その詳細が明らかになることは、古墳時代研究の基礎資料

整備として大きな意義をもつ。

その中でも、七観古墳は中期中葉の「鋳留技法導入期」の典型的な古墳として学史的にも著名であり、朝鮮半島との交渉が示されるものも含め、多彩な副葬品を備えている。こうしたことから、関連資料を踏まえた考察では、「鋳留技法導入期」の技術革新や副葬品組成について、踏み込んだ議論を展開しうる。

3. 研究の方法

(1) 資料化作業

現在の研究動向に即し、最新の水準を満たした実測図作成や写真撮影をおこなうため、最先端で研究を牽引している複数の研究者に助言や助力を求める。また、多量の遺物の資料化作業を独力で遂行することは困難なので、古墳時代を専攻する大学院生の助力を得る。

なお、七観古墳出土遺物と大塚越古墳出土遺物については、1997年に京都大学総合博物館春季企画展として開催された『王者の武装—5世紀の金工技術—』の準備過程において、主要な金属製品についてX線写真撮影が実施されている。資料化作業を進めるにあたっては、そのフィルムを適宜参照することが可能である。

(2) 報告作業

デジタル・トレースを採用することにより、多量の実測原図の持ち運びや広大な作業スペースを必要とすることなく、効率的にトレースを進めることが可能となる。また、パソコンさえあれば作業の場所を選ばず、短い時間であってもアプリケーションを起動する手間のみで作業を進めることができる点も効率化に寄与する。応募者は金属製品についてすべてデジタル・トレースをおこなった報告書（阪口英毅（編）2006『小野王塚古墳 出土遺物保存処理報告書』小野市文化財調査報告第27集，小野市教育委員会）を作成した経験があるため、金属製品については技術の蓄積がある。一方、土製品や石製品については経験に乏しいため、これらの材質に最適な表現方法を模索する。この点については、京都大学文化財総合研究センターなど、デジタル化を積極的に推進している機関にも助言を求める。

報告の作成作業に際しては、観察・調査成果を過不足なく伝達するという視点から、遺物の特性に応じた適切な報告の方法を吟味する。また、入稿形態については、将来的な二次的活用に備え、トレースに限らず、より効率的なデジタル化をおこなう。

4. 研究成果

(1) 報告が未了の成果

七観古墳出土遺物については、鉄鏃・柄付手斧・玉・馬具・刀剣について、ほぼ実測作業が終了した。しかし、細片化や錆化の著しい甲冑、点数の多い埴輪については50%程度の達成率にとどまった。したがって、申請時に目標としていた研究成果の公表にはいたらなかった。

大塚越古墳出土遺物については、玉の分類・計測・実測を実施した。鉄製品・青銅製品については、実測作業が未了である。

上記二古墳の出土遺物資料化作業は2010年度も継続しておこなっている。

(2) 報告が完了した成果

聖塚古墳出土遺物については、資料化作業を完了し、実測図をデジタル・トレースするとともに、各遺物についての所見を文章にまとめた。その成果を、亀岡市文化資料館刊行の特別展示図録に掲載されるよう寄稿した（阪口英毅（他7名，1番目）2010「綾部市聖塚古墳出土遺物報告」『丹波の方墳再考！—一方墳から丹波の古墳時代中期の謎を解く—』，亀岡市文化資料館，21-28）。

また、上記の問題意識を兵庫県雲部車塚古墳出土遺物の報告作業においても活かし、報告書を作成した（阪口英毅（他15名，8番目）2010『雲部車塚古墳の研究』（兵庫県立考古博物館研究紀要）第3号），兵庫県立考古博物館，286）。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

- ① 阪口英毅（他7名，1番目），「綾部市聖塚古墳出土遺物報告」，『丹波の方墳再考！—一方墳から丹波の古墳時代中期の謎を解く—』，査読無，亀岡市文化資料館，2010，21-28
- ② 阪口英毅，「日本考古学における「戦争」研究の動向」，『史林』，査読有，93巻1号，2009，197-208
- ③ 阪口英毅，「前・中期型甲冑の技術系譜」，『月刊 考古学ジャーナル』，査読無，Vol. 581，2009，7-11
- ④ 阪口英毅，「学史のなかの「横矧板革綴短甲」」，『王権と武器と信仰』，査読無，2008，697-707

- ⑤ 阪口英毅, 「いわゆる「鋳留技法導入期」の評価」, 『古代武器研究』, 査読無, Vol. 9, 2008, 39-51

〔学会発表〕 (計 1 件)

- ① 阪口英毅, 「いわゆる「鋳留技法導入期」の評価」, 古代武器研究会, 2008年1月13日, 滋賀県立大学

〔図書〕 (計 1 件)

- ① 阪口英毅 (他 15 名, 8 番目), 兵庫県立考古博物館, 『雲部車塚古墳の研究』 (「兵庫県立考古博物館研究紀要」第 3 号), 2010, 286

6. 研究組織

(1) 研究代表者

阪口 英毅 (SAKAGUCHI HIDEKI)
京都大学・大学院文学研究科・助教
研究者番号: 50314167

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者